

## 第3章 PTSD理論の政治学

### 科学と政治学

#### PTSD理論と私情

パキスタンとアフガニスタンで活動する医療援助団体であるペシャワール会の医師・中村哲（中村，2007年）は、早魃<sup>かんぼつ</sup>を解消するため、2000年夏からアフガニスタンで、現地の住民たちを指揮しつつ、1500本以上の井戸や全長26キロほどに及ぶ灌漑用水路を掘ってきました。それは、援助する者が他にいないため、きわめて深刻な早魃から住民を救い出さない限り、それによって多くの人々が病気になったり死亡したりしてしまうので、病気を治療するところではないという、やむにやまれない事情があるからです。「百の診療所より一本の用水路を」、「とにかく生きておれ、病気は後で治す」という姿勢は、こうした極限状況では一貫性を持つものとして十分に理解できます。このように、医療関係者であっても、政治的、行政的行動を医療に優先させてもよい、あるいは、優先させない限り自分たちの存在意義がなくなってしまう場合のあることは、まぎれもない事実です。

PTSDという概念は、政治的背景の中から生まれたものだそうです。それは、この分野で有力な臨床的研究者として知られるジュディス・ハーマンが、主著『心的外傷と回復』（みすず書房）の冒頭で、「本書はその生命を女性解放運動に負うものである」（ハーマン，1996年，ixページ）とはっきり謳<sup>うた</sup>っていることからわかります。

言うまでもありませんが、PTSDという概念には、それ自体に原因論——過去の“トラウマ”がその後の症状の原因になるとする考えかた——が含まれています。しかし、この種の原因は、科学的方法を使って厳密に突き止めるべきものであって、そこに、被害者への同情などの感情的要因や政治

## 加害者と被害者の“トラウマ”

的要因が入り込む余地はありません。この点をきちんとわきまえておかないと、さまざまな問題が発生するおそれがあります。病気や症状を治療しようとする、いわば公的な目的と、被害者をその状態から救い出したいという私的な願望とが、PTSD理論の内部で渾然一体になっているとすれば、そこに、この理論の大きな欠陥があることになるわけです。

誤解を避けるために書き添えておくと、私は、同情そのものが悪いと言っているわけではありません。同情などの私情に、特に自己満足的側面がある場合、それを（おそらく無自覚のまま）優先させようとして、混同してはならないものを混同する人たちが、現実に少なくないわけですが、そのような、いわば公私混同をすべきではないと言っているのです。

ついでながらふれておくと、DSM-IVで言うところの解離性同一性人格障害（多重人格性障害）の研究で有名なコリン・ロスが、この障害に関するカンファレンスで、治療者たち自身を対象に行なった調査によれば、女性治療者（310名）の60パーセントが、自らも幼児期に性的虐待を受けたと主張していることがわかったそうです。なお、男性治療者（69名）の場合には、その比率は35パーセントでした（Ross, 1997, p. 271）。治療者自身が、このような経験がある（と自認している）ことは、患者を治療するうえで有利に働くこともあるかもしれませんが、その場合、そこに私情を差し挟まないようにするのは、かなり難しいように思います。

### “心のケア”の問題点

PTSDという考えかたには、その背景に政治的要素が含まれているため、悲惨な状態にあって困っている人たちに救いの手を差し伸べたい、という同情的な気持が、抜きがたく潜在しているように思います。同情は、それ自体には問題がないとしても、押しつけの形になる時には、大きな問題に発展することが少なくないわけですが、この点を理解していただくため、まず、“トラウマ”を負った人たちに対する“温かい”接しかたが、相手をどれほど困惑ないし憤慨させる場合があるかを見ておくことにしましょう。なお、PTSDという考えかたに関係する心理的要因については、次の第4章および第5章で詳細に検討することになります。

最初にとりあげるのは、1980年夏に東京で起こった新宿駅西口バス放火事件で、全身に重度の火傷を負ったある女性の事例です。これは、新宿駅西口のバスターミナルに停車中のバスに乗り込んだ、精神科入院歴を持つ38歳の男が、持参したガソリンを車内にまいて火をつけ、20名の乗客を死傷させた凶悪な無差別大量殺人事件です。この女性の人生は、その時に負った全身80パーセントの火傷のおかげで、大幅な変更を余儀なくされました。

この女性は、たび重なるマスコミ取材の身勝手さに憤りを感じ、取材をずっと拒否していました。しかし、その中で、あるテレビ局の記者の取材には応じることにしたのです。「僕はあなたをうらやましいと思います。自分自身を真正面からみつめざるを得ない機会を得たということ」 という記者のひとことが、そのきっかけになりました。「うらやましい」という主体的な言葉が、ひとつの本質をついていたのです。

事件に遭遇したことを、彼はそう感じとる。不運、災難、不幸、あるいは貴重な体験をした被害者——と、それまでに私に取材を依頼してきた連中は、常にそういう言葉で彼等自身は理解しようとした。

それらの言葉は私の感情にひっかかった。不運、災難、不幸、貴重な体験、と、いらぬお世話はやめてくれと言いたかった。不運であるか、災難であるか、不幸であるか、貴重な体験であったか、それは私が感ずる問題である。彼等自身が感じてもない、感じようもないものを便利な常套句で規定してしまうことこそ、本来のマスコミが荷うべき使命とは桁はずれにかけはなれた、それは暴力でしかない。そんな常套句からは真実はかけらほども捜せはしないのだ。(杉原、1983年、224ページ)

この女性から強く非難されているマスコミ関係者たちは、もちろん悪意を持っていただけではなく、自分たちの使命や仕事に懸命にとり組んでいるつもりだったのでしょう。しかし、特に災害や犯罪の被害者の場合には、相手の気持をわかって(あげて)いるつもりが、当事者からすれば「いらぬお世話」になってしまい、その結果として、両者の間に決定的なずれが生じてしまうのです(その好例としては、たとえば阪神淡路大震災の中で起こった事例が

## 加害者と被害者の“トラウマ”

あります。副田，1996年，248ページ参照）。そのため，この犯罪被害者は，周囲の“好意”に強い憤りを感じることになったのです。

次に紹介するのは，山口県光市で起こった母子惨殺事件の被害者の遺族である本村洋さんが，マスコミの“善意”を知って衝撃を受けた時の出来事です。

F〔犯行当時18歳の少年だった加害者〕が検察に逆送され，公開の刑事裁判にかけられることになった瞬間から，本村は，実名報道が当然だと思っていた。だが，初公判のあとも，マスコミは相変わらず犯人の匿名報道に終始している。理由は，少年の人権とプライバシーの保護だった。

「人を二人も殺害し，謝罪すらしない人間を守る“人権”とは何なのか」〔中略〕

取材に来たテレビ局の記者は本村に向かって，こう言った。「“強姦”ということがわからないように報道しますので安心して下さい」

本村はショックを受けた。マスコミがうわべだけのヒューマニズムに毒されている証拠だと思った。真実が報道されなければ，つまり，どんなひどいことが行われたかが報道されなければ，死んだ人間は浮かばれない。犯行の残忍性を和らげて，どうして二人が味わった苦しみや怒り，無念さが理解されるのか。強姦の事実を隠すことがヒューマニズムだと勘違いしているレベルでは，ジャーナリズムの存在意義はない。（門田，2008年，101-102ページ。引用に際して段落を変更）

これらは，報道関係者が，いかに被害者やその遺族の心情を理解していないかを端的に示す証拠です。この齟齬<sup>そご</sup>は，PTSDの治療のみならず“心のケア”を専門とする人たち一般にも，そのまま当てはまるはずで

### 両者の間に発生するずれの本質

次にとりあげるのは，2001年にハワイ沖で発生した「えひめ丸」事件に關係して起こった問題です。周知のように，宇和島水産高校の実習船「えひめ丸」は，軍船にありうべからざる遊興的かつ低俗な目的で急浮上したアメリカ海軍の原子力潜水艦による，夢想だにしなかった下側からの衝突のため

沈没し、高校生を含めて9人が行方不明になりました。

急遽、現地入りした不明者の家族は、アメリカ軍側から事故について説明を受けたり、事故現場へ案内されたりしていましたが、悲しみや怒りや憎しみは増すばかりで、不眠や苛立ちなどを起こす人たちもいました。そのような状況にあった時、アメリカ赤十字社などの慈善団体が、ホノルルの日本総領事館を通じて、日本語が話せるカウンセラーの派遣を申し出ます。ところが総領事館は、「必要な状態にない」として、その申し出を謝絶したのです。この問題について、ある臨床心理学研究者は次のように述べています。

断ったのは家族の意向を領事館が察したためであったと考えるのが自然である。もし家族がカウンセラー派遣を望むと予測されるなら、この申し出は当然実現していたはずだからである。ここにカウンセラーを派遣しカウンセリングを受けさせようとする側と、それを受ける側との間に起きるズレや溝を見ることができる。〔中略〕

いったい何が起こったのか、その事実を少しでも正確に知りたい、そして相手方はできるだけ詳しく誠実に説明しようとしてほしい、さらに謝罪の気持の伝わる態度を表明してほしい。それが被害者に対する最低の礼儀であり、とるべき態度である。〔中略〕

見も知らぬカウンセラーがやさしげに訪れてくることの見間違いや違和感は、言うまでもないことなのではないか。(小沢, 2002年, 154-155 ページ)

この時に家族たちが示した“症状”は、PTSD理論を信奉する人たちから見ると、まさしくPTSD類似のもの（あるいは、“急性ストレス障害”）なのでしょう。強度の心理的ストレスがある中で起こった、明らかに“心因性”の変調だからです。そして、この家族たちに手を差し伸べようとしたのは、赤十字社などの慈善的な医療援助を業務とする、中立的で正統的な団体です。にもかかわらず、その温かい申し出は、援助されるはずの側に拒絶されてしまったのです。ここに問題の核心があります。いらぬおせっかいを焼いて、これ以上われわれを苛立たせないでほしいというのが、この時の家族